

# 『源氏物語』の命令・勧誘表現再論（一）

川上徳明

## はじめに

筆者はこれまで中古の文学作品の命令・勧誘表現について考察し、幾つかの小論を発表してきた。<sup>\*1</sup>『源氏物語』についても「源氏物語の命令・勧誘表現」（昭和五一年一月「国語国文」。以下、前稿と呼ぶ。）がある。この前稿の後、調査の対象を多くの作品に広げ、それに伴って、例えば用例採否の基準を見直し、待遇に関する問題（「敬度」等）についても整理を進めるなど、考察の方法を確かめてきた。二十余年を経て改めて『源氏物語』の命令・勧誘表現について再論する所以である。

本稿は以下

- 一 命令・勧誘表現の四段型体系
- 二 「敬度」「敬度値」「敬度指數」

『源氏物語』の命令・勧誘表現再論（一）

な 命 令 ・ 劝 誘													合 計							
量													③ 推量一疑問				④ 反語…否定			
5	7	8	9	10	11	12	13	小計	1	2	3	4	5	6	小計	1	2	3	4	合計
5	7	8	9	10	11	12	13	こそ……(給ふ)べけれ	なむ・ぞ……(給ふ)べき	なむ・ぞ……(給ふ)べし	こそ……(給ひ)てめ	こそ……(給ひ)なめ	こそ……(給は)め	合計	1	2	3	4	5	638
4	2	17	0	0	0	1	1	39	7	2	5	2	3	9	28	0	3	1	1	5

という二つの観点から論を進める。右一、二の詳細については既発表の拙論<sup>\*2</sup>に譲ることとする。また、用例採否の基準は拙稿「命令・勧誘表現研究のために」による。使用テキストは日本古典文学大系『源氏物語』である。ただし、玉鬘・匂宮・須磨・梅枝・柏木・宿木の六巻の用例については、次のような処理をした。

①『源氏物語大成』により、「大系」の本文が青表紙本系統本文に一致する場合は、そのまま採用する。

②「大系」の本文が、青表紙本系統本文に一致せず、河内本または別本系統本文に一致する場合は、用例としない。

③この場合、本文の検討は、命令・勧誘表現を形成する述語の中核的な部分のみを問題とする。<sup>\*4</sup>

一

先ず『源氏物語』の命令・勧誘表現の全用例の一覧表（第1表）を掲げる。

第1表 表現形式別一覧

命 令																婉 曲						
① 命 令 形																② 推						
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	(いざ) 助詞下接 (内数)	小 計	1	2	3	4	5
動詞・補助動詞	せよ・させよ	れよ・られよ	しめよ	ね	てよ	たれ	給へ	給ひてよ	給ひたれ	給へれ	(給ふ)べきなり	かし	よ	や	566	7	5	2	0	0		
命令形	205	8	0	8	12	6	2	300	12	11	0	0	2	48	13	9						

注( )で包んだ語は、それが無いことがある意。

これは前述の四段型体系によつて大きく分類し、更にその内部を具体的な表現形式ごとに細分したものである。なお、以下、表中の諸形式を次のように○型と呼ぶ。

- 「①命令形」中の諸形式………①型
- 「②推量」中の諸形式………②型
- 「③推量+疑問」中の諸形式………③型
- 「④反語……否定」中の諸形式………④型

第1表の形式は中古の主要な仮名文学作品に見られる命令・勧誘表現の諸形式を網羅・整理することによつて作成したものであり、従つて、各作品に共通するものである。

本表で、例えば「①型・3」の「しめよ」の項、「②型・5」の「給はむ」の項など用例を欠くものがあるが、他との比較のために敢えてそのままにしてある。なお言えば、用例を欠くことの確認にも意義があろう。

表を四段型体系の面から概観する。総用例数は六三八である。<sup>\*5</sup>

①型が五六六例で全体の八八、七%、約九割に及ぶ。中

古の主要な仮名文学作品一五に見られる①型の比率は八九、八%であつて、『源氏物語』の場合もほとんどそれに一致する。これは「①型・1」の動詞（敬語動詞を含む）、補助動詞（「たてまつる」四例、「なす」一例の計六例）の命令形及び「①型・8」の「給へ」の多用による。特にこの尊敬の補助動詞「給へ」（二重敬語を含む）は三〇〇例であつて、「①型・1」の動詞、補助動詞の計を大きく上回る。またこの形式の全用例に占める比率も四七、〇%とはなはだ高い。

一方、婉曲な命令・勧誘表現である②型、③型、④型は少数である。文末の推量形式による婉曲な形式である②型の例は三九例、「推量—疑問（問い合わせ）」の形式によつて相手の意向を尋ねる③型は二八例、「反語……否定」の形式による、最も婉曲間接的な④型は僅かに五例を見るに過ぎない。このうち②型の中では「8」の「こそ……（給は）め」の例が比較的多く、③型の中では「6」の「給ひてむや」の例が割に多い。

以上、『源氏物語』の命令・勧誘表現を四段型体系の観点から数量的に概観した。①型即ち命令形によるものが最も多数を占める。これは前述のように中古の仮名文学作品に一般であった。その意味でこれが命令・勧誘表現における基本的な形式であると言えよう。また、①型の中ではとりわけ「給へ」（二重敬語を含む）が多いことを確認した。

## 二(一)

第2表は『源氏物語』の命令・勧誘表現の全用例を次により整理したものである。即ち

- (一) 縦に、敬度A・B・C・D・Nと四段型
- (二) 横に、話し手(命令者)、聞き手(受命者)の地の文における敬度の組み合わせをとつた一覧表である。

先ず、(一) 敬度A・B・C・D・Nの例を挙げる。

敬度A 二重敬語・最高敬語のもの。

御文などを、見せさせ給へかし。  
(東屋、第五冊一八六頁。以下、五・一八六のように示す。弁尼→薰)  
さて晩にこそは、帰らせ給はめ。  
(浮舟、五・二二一。大内記道定→匂宮)

心のほどを、御覧ぜよ。  
(若紫、一・一九五。源氏→尼君)

敬度B 敬体のもの。

おなじ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定め給へ。  
(松風、二・二二二。源氏→紫上)  
宿直所、ゆづり給ひてんや。  
(藤裏葉、三・一九〇。夕霧→童)

あひおぼせよ。  
(總角、四・四〇七。薰→中君)

敬度C 常体のもの。

第2表 敬度別一覧

項		イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	型別小計	敬度別小計	敬度別%	
話し手・ 聞き手の 地の敬度		(a) ↓ a	(a) ↓ b	(a) ↓ c	(b) ↓ a	(b) ↓ b	(b) ↓ c	(c) ↓ a	(c) ↓ b	(c) ↓ c				
敬度	型													
A	(4)					1			1		2	121	18.9	
	(3)					2			2		4			
	(2)	1				1			11	1	14			
	(1)		1		3	47			36	14	101			
B	(4)					1	2				3	343	53.8	
	(3)					9	5			1	15			
	(2)					7	4		3		14			
	(1)		8		173	61		27	42	311				
C	(4)										0	153	24.0	
	(3)					2	6				8			
	(2)		1		3	3			4		11			
	(1)		4	3	7	97			23	134				
D	(4)										0	18	2.8	
	(3)										0			
	(2)										0			
	(1)					17			1	18				
N	(4)										0	3	0.5	
	(3)		1								1			
	(2)										0			
	(1)		1		1						2			
計		1	16	3	3	254	195	0	80	86	638		100%	
		20			452			166						

もし、き、出でたてまつらば、告げよ。 (若紫、一・一三三。兵部卿宮→女房)

はや、舟出して、この浦を去りね。 (明石、二・六二。故院→源氏)

まめやかに、つかうまつり、見えたてまつれ。 (野分、三・五二。源氏→夕霧)

敬度D 尊大体のもの。

少し、よろしからむことを申せ。 (帚木、一・八四。君達→藤式部丞)

猶、もて参れ。 (夕顔、一・一四九。源氏→預の子)

男どもは、このわたり近からん所に、よく隠ろへて侍へ。 (浮舟、五・二一八。匂宮→供の男ども)

敬度N 「謙譲語十尊敬語」の形で、謙譲語による「受手尊敬」の敬意は話し手自身に向かい、尊敬語「給ふ」の敬意は聞き手に向かうもの。(待遇価値をほどニュートラルとみてNで表わす)。

まわり給へ。 (乙女、二・三〇六。大宮→夕霧)

忍びてはまわり給ひなむや。……とく、まわり給へ。 (桐壺、一・三五。帝→桐壺更衣母)

次に、前掲(二)の、話し手(命令者)、聞き手(受命者)の地の文における敬度について説明する。

これは登場人物(話し手、聞き手)に対する地の文における言語的な待遇の高低の意であつて、これを①、②、③の三段階に分ける。話し手については、二重敬語・最高敬語で待遇されるものを①、敬体のものを②、為手尊敬語のないもの(常体または謙譲語による待遇)を③とする。

聞き手については、主として、その命令の詞に連続する地の文の受手尊敬語の有無及びその程度により分ける。

即ち、受手尊敬語の程度の高いものを①、通常の受手尊敬語のものを②、受手尊敬語のないものを③とする。

この話し手（命令者）、聞き手（受命者）の地の文におけるⓐ、ⓑ、ⓒの敬度は、それぞれ会話文中の敬度A、B、Cにほぼ等しい。<sup>\*7</sup>

## 二 (2)

右によつて、地の文の待遇ⓐ、ⓑ、ⓒの各段階に所属する人物（主な人物）を列挙すれば次のようになる。

- ⓐ 源氏・桐壺帝（故院）・朱雀院・春宮（冷泉）  
藤壺中宮・秋好中宮（梅壺）・明石中宮・落葉宮
- ⓑ 源氏・桐壺帝・朱雀院・冷泉院・螢兵部卿宮・八宮・匂宮・右大臣（弘徽殿父）・内大臣（頭中将）・内大臣君達・鬚黒・按察大納言・夕霧・薰・柏木・明石入道・北山僧都・横川僧都  
藤壺中宮・秋好中宮・弘徽殿女御・大宮・落葉宮・桐壺院女一宮・同女三宮・朱雀院女三宮・一条御息所・六条御息所（含物怪）・葵上・紫上・末摘花・朧月夜君・玉鬘・花散里・雲井雁・近江君・大君・中君・浮舟・宮君・明石姫君・明石君・宰相君・桐壺更衣母・尼君（紫上祖母）・右近（夕顔侍女）
- ⓒ 頭中将・蔵人少将・薰・柏木・藤侍従・左馬守・紀伊守・豊後介・右近大夫・博士・大内記道定・藤式部丞・良清・時方・小君・惟光・随身・宿直めく男・預の子・横川僧都・北山聖・明石入道  
六条御息所（物怪）・朧月夜君・近江君・明石君・浮舟・軒端荻・空蟬・夕顔・源内侍・大輔命婦・右近（夕顔侍女）・右近（浮舟乳母子）・女房（紫上その他の）・小侍従・辨尼・小野妹尼・少将尼・女童等  
右で一段階に亘つて出てくる人物は、それぞれの場面によつて二種の待遇がなされているものである。例えは、

桐壺帝が①の他、②にも出てくるが、これは次の例である。

「なうとみ給ひそ。あやしくよそへ聞えつべき心地なむする。なめしと思さで、らうたくし給へ。……」など、

きこえつけ給へれば、（桐壺、一・四七。桐壺帝→藤壺）

ここは入内した藤壺に向かって桐壺帝が幼い源氏のことを依頼している場面である。「きこえつけ給へれば」とあつて、桐壺帝に対し②待遇である。これは相手が藤壺のせいなのであろうか。なお、桐壺帝が話し手（命令者）の例は一〇例であるが、②待遇はここ一箇所のみである。（『源氏物語大成』によれば、河内本にはこの部分「ついにきこえさせ給を」とある。これなら①待遇である）。

## 二(3)

先の第2表を敬度の面から概観する。

- 1 敬度A（二重敬語・最高敬語）のものが一〇%に近く、
- 2 敬度B（敬体）のものが全体の半数以上を占め、
- 3 このA、B両者の計は約七三%，つまり全体の約四分の三を占める。
- 4 敬度C（常体）のものは約四分の一で、
- 5 敬度D（尊大体）のものは三%に満たず、
- 6 敬度N（「謙讓語+尊敬語」のうち、先に規定したもの）の例は僅かに（前掲の）三例のみである。

結局、右3の事実から全体として敬度の高さを思わせるのであるが、次にその点を確認する。

敬度の高低、つまり敬意の度合の、相対的な高低を数値化したものを「敬度値」と呼ぶ。具体的には次の数値とする。

- |     |   |   |       |
|-----|---|---|-------|
| 敬度A | … | … | プラス3  |
| 敬度B | … | … | プラス1  |
| 敬度C | … | … | マイナス1 |
| 敬度D | … | … | マイナス3 |
| 敬度N | … | … | 0     |

なお、右の敬度Nは前述の如く待遇価値をほぼニュートラルとみて、敬度値を0とするのである。敬度値がDの下ではないこともあつて、敬度Eとはしない。

次に、ある作品、ある類型、ある登場人物等における敬度値の平均を「敬度指数」と称する。敬度指数は敬度値の和を用例数で割つて算出する。従つて敬度指数の最高値はプラス三、〇〇、最低値はマイナス三、〇〇となる。<sup>\*8</sup>

## 二 (4)

具体的な例を挙げる。この方法によつて算出した『源氏物語』の敬度指数はプラス〇、七八である。比較のために中古の文学作品の敬度指数の表を掲げる。

第3表 各作品の敬度指数

	敬度指数	順位
夜の寝覚	+1.21	1
和泉式部日記	+0.81	2
源氏物語	+0.78	3
堤中納言物語	+0.60	4
讃岐典侍日記	+0.55	5
落窪物語	+0.47	6
竹取物語	+0.30	7
簾物語	+0.11	8
古本説話集	-0.05	9
大和物語	-0.18	10
土佐日記	-0.25	11
平中物語	-0.29	12
今昔物語集	-0.34	13
更級日記	-0.44	14
伊勢物語	-0.46	15
紫式部日記	-0.56	16

『源氏物語』の数値は右の第3表では第三位に位置する。『夜の寝覚』の敬度指数が突出しているが、これは登場人物がほとんど高貴の人々に限られていることによる。第二位の『和泉式部日記』の敬度指数が高いのは、用例が帥宮と作者とに関わるもののがほとんどで、かつ相互に高い待遇をしているからである。この問題については既に述べたがあるので、詳細は省略する。<sup>\*</sup>

## 三

先の第2表を基に、話し手、聞き手それぞれの、地の文における待遇（敬度a、b、c）と敬度指数との関係について整理したのが次の第4表である。以下、若干の項目について略述する。

第4表 地の敬度の関係と敬度指数

項	地の敬度の関係	敬度指数	用例数
イ	(a)→(a) →	+3.00	1
ニ	(b)→(a) ↗	+3.00	3
チ	(c)→(b) ↗	+2.25	80
ホ	(b)→(b) →	+1.30	254
リ	(c)→(c) →	+0.67	86
ロ	(a)→(b) ↘	+0.38	16
ヘ	(b)→(c) ↘	-0.44	195
ハ	(a)→(c) ↘	-1.00	3

(注) 「(c)→(a)」は用例がないので、表に入れていない。

矢印の方向は話し手、聞き手の地の文における敬度の上下関係を示す。

- 1 「イ」の項は(a)→(a)、即ち地の文における敬度が最高同士（春宮→父朱雀院）の間の表現であり、敬度指数も最高値のプラス三、〇〇になっている。ただし一例だけであるから、ここではこれ以上は触れない。

- 2 地の文における敬度がそれぞれ同段階の話し手・聞き手の間の表現でも、「ホ」と「リ」とでは敬度指数に大きな差がある。即ち地の文における敬度の高い者同士の間では高い待遇表現―敬語的表現が多いことを知る。

- 3 同様に、下から上への間（「ニ」及び「チ」）、上から下への間（「ロ」及び「ヘ」）においても、地の文における敬度が相対的に高い者の間の表現である「ニ」と「ロ」とが、それぞれ他に比して高い敬度指数を示していることを認め得る。しかもその差は歴然としている。

- 4 更に「ハ」の如く話し手・聞き手の間の地の文における敬度の差異が大きい―これはひいて身分的な懸隔の大きさでもある―場合は、用例が少ないが、すべて敬度Cで敬度指数は表中最低になっている。

- 5 聞き手が同じ⑥段階であっても、「チ」と「ホ」と「ロ」とでは当然ながら敬度指数に大差がある。〈下から上へ〉と〈対等間〉と〈上から下へ〉との差である。また聞き手が同じ⑦段階の場合でも、話し手（命令者）如何(c)、(b)、(a)によつて同様に敬度指数に大きな差が見られる。

第5表 性別の敬度指数

	話手→聞手	A	B	C	D	N	計	敬度指数
『源氏物語』の命令・勧誘表現再論（二）	イ 男→男	24 (15.0)	48 (30.0)	76 (47.5)	12 (7.5)	0 (0)	160 (100%)	+0.05 +0.55
	口 男→女	42 (14.4)	186 (63.9)	56 (19.3)	5 (1.7)	2 (0.7)	291 (100%)	+0.83
	ハ 女→男	16 (30.2)	31 (58.5)	5 (9.4)	0 (0)	1 (1.9)	53 (100%)	+1.40 +1.43
	ニ 女→女	38 (35.5)	56 (52.3)	12 (11.2)	1 (1.0)	0 (0)	107 (100%)	+1.45
	計	120	321	149	18	3	611	+0.78

注 物怪・神仏等に対する27例を除く。

#### 四

次に性別の面から敬度指数を見る。

話し手、聞き手の性別による敬度指数を整理したのが第5表である。敬度ごとに用例数の%も示した。なお、全六三八例中、物怪、神仏等に関わる二八例は除外してある。

先ず、女の言葉に敬度の高い表現が多いことが知られよう。「ニ 女→女」の場合は特にそれが著しい。Aの比率が三五、五%と極めて高く、更にA、B二段階の計もほとんど九〇%に近い。敬度指数は最高のプラス一、四五である。また「ハ 女→男」の場合も、A、B二段階でほとんど九〇%、敬度指数もプラス一、四〇である。

一方、男同士の場合「イ 男→男」は逆にC、Dの二段階で五五%と対蹠的であり、敬度指数もプラス〇、〇五と甚だ低い。「口 男→女」の場合は敬度指数プラス〇、八三で先の作品全体の敬度指数プラス〇、七八をやや上回る。これはA（二重敬語、最高敬語）はあまり用いないが、B（敬体）の使用率が高いせいである。

結局、男が話し手の場合の敬度指数はプラス〇、五五、女が話し

第6表 主要人物の敬度指数

人 物	地の文 の待遇	話手=命令者として		聞手=受命者として	
		用例数	敬度指数①	用例数	敬度指数②
匂宮	(b)	31	-0.35	8	+2.25
源氏	(b)	184	+0.28	31	+1.90
浮舟	(b)(c)	8	+1.25	41	+1.78
横川僧都	(b)(c)	11	+0.27	4	+1.50
女三宮	(b)	2	+2.00	14	+1.43
薰	(b)	59	+0.83	16	+1.50
玉鬘	(b)	5	+1.00	18	+1.28
紫上	(b)	9	+1.22	31	+1.13
夕霧	(b)	25	+1.16	35	+1.03
八宮	(b)	8	+0.75	1	+1.00
柏木	(b)(c)	18	+1.77	7	+0.43
右近(1)	(b)(c)	2	+1.00	14	-0.29
右近(2)	(c)	10	+1.00	8	-0.75
惟光	(c)	8	+2.25	11	-0.82

注 「右近(1)」は夕顔の侍女、「右近(2)」は浮舟の乳母子である。

手の場合のそれはプラス一、四二三であつて、その差は真に画然たるものがある。<sup>\*</sup><sub>10</sub> 次の第6表は主要人物（用例が多い人物）の敬度指数の表である。各人につき話し手の場合、聞き手の場合の二つの敬度指数（①・②）を対比する形で示し、聞き手としての敬度指数の高い順に並べてある。

## 五

匂宮の話し手としての敬度指数がひとりマイナスであつて、はなはだ低い。これは聞き手が、主として従者の家司時方、浮舟の乳母子、その他身分の低い者であることによる。逆に聞き手としての敬度指数は物語中で最高であるが、敬度A・Bに集中していることによる。

匂宮につぐ源氏については次項で具体的に考察する。

第三の浮舟の、聞き手としての敬度指数が意外に高いのが注意される。すべて敬度A・Bの例である。これは四一例中、相手が女性の例が三一例と多く、中でも乳母・女房、僧都の妹尼、少将の尼その他、身分の低い女性の例が多いことが主な理由である。

女三宮・紫上・夕霧の場合には右にみた三者と違つて、聞き手としての敬度指数が話し手としての敬度指数よりも低くなつてゐる。これは次のように考えられる。

先ず女三宮の話し手としての敬度指数はプラス二、〇〇と高貴の方としては異常に高いが、これは相手が父朱雀院と子の薰との二例だけだからである。用例の少なさと相手の身分の高さとが敬度指数をはなはだ高くしてゐる。

紫上の例では、聞き手としての敬度指数が予想外に低い。直上の玉鬘よりも低くなつてゐるが、これは源氏が相手（話し手）であることが多いことによる。夕霧の場合も相手（話し手）の地位の高さ及び父源氏からのものの比率が高いことなどによつて聞き手としての敬度指数が低くなつてゐるのである。

柏木が話し手の例は一例を除き「若菜下」「柏木」の巻のもので、簡単に言えば、すべて女三宮を巡つてのものである。話し手としての敬度指数が異常に高いのは、対等以上の相手に対し、敬度A・Bで待遇しているだけではなく、女三宮の女房小侍従に対してもすべて敬度Bの待遇であることによる。柏木の立場や心理状態を窺わせるものであ

る。柏木の聞き手としての敬度指数が予想外に低いのは、相手が父、母、源氏、夕霧の四者に限られ、敬度B・Cの待遇になつていることによる。

最下段の惟光の場合は、二つの敬度指数（①・②）の差がプラス、マイナス三以上になつている。惟光の立場からみて当然であろうが面白い。

以上、第6表について簡単に説明した。主要人物のうち数名については次項以下、具体的に考察するので、ここでは略述にとどめる。

## 六

### 六（1）

前項までは、作品全体を数量的に考察してきたが、以下、主な登場人物ごとに検討する。

『源氏物語』の登場人物中、命令・勧誘表現に最も多く関わるのは源氏であり、話し手（命令者）、聞き手（受命者）としての用例の計は一一五例に及ぶ。先ず源氏をみようと思う。

次の第7表は源氏が話し手の場合の一覧表である。



この表は

- (1) 縦に、聞き手をそれぞれの地の文における待遇の高低によって配列し、
- (2) 横に、敬度A・B・C・D・Nと四段型をとつたものである。

用例数は一八四例である。おおまかに言って、左上から右下へかけての用例の分布の傾向を認めることが出来る。また下端に併記した『源氏物語』の全例と対比すると、源氏が話し手の場合、Aの率が低く、逆にC・Dがちょうどその分だけ高率になつていて、従つて敬度指数もそれに相当してプラス○、二八と低い。(『源氏物語』全体ではプラス○、七八)。

なお、性別にみると、男に対する用例は五四例で、敬度指数はマイナス○、六七、女に対する用例は一二六例で、敬度指数はプラス○、七〇である。男女差が甚だしいことを知る。これは表の下部、小君以下に敬度C、Dの男が集中していることによる。(住吉明神、物怪に対する計四例を除く)。

更に、この、表の下端に分布する敬度Dの用例が①型だけであることも注意される。

## 六(2)

以下、表中の幾つかの例を具体的にみていくこととする。

初めにBの③型の例を見る。

北山で若紫の素姓を聞いた源氏は、僧都や女房に尼君(紫上の祖母)へのとりなしを依頼する。

(1) 「あやしき」となれど、幼き御後見におもほすべく（尼に）きこえ給ひてむや。……」（若紫、一・一九〇）。

源氏→僧都)

次は右に続く場面である。

(2) 「げにうちつけなりと（女房が）おぼめき給はむことわりなれど、

初草の若葉の上を見つるより旅寝の袖も露ぞかはかぬ

ときこえ給ひてむや」との給ふ。（女房）「……」と（源氏に）きこゆ。「おのづから『さるやうありてき  
こゆるならむ』と思ひなし給へかし」との給へば、（女房は）入りて（尼に）きこゆ。（源氏→女房）  
こうして尼君に会つた源氏は若紫の世話を申し込む。

(3) 「あはれにうけ給はる（紫の）御有様を。かの過ぎ給ひにけむ（紫の母の）御かはりに（私を）おぼしない  
てんや。……。『（私と）おなじさまに（紫は）ものし給ふなるを、（私を紫の）たぐひになさせ給へ』と、  
いと聞えまほしきを、かゝるをり侍りがたくてなむ。……」「と（尼に）聞えたまへば、（尼）「いと嬉しう思  
ひ給へぬべき御事ながらも……」との給ふ。（源氏）「みなおぼつかなからず、うけ給はるもの。所狭うお  
ぼし憚らで、（紫に）思ひ給へよる（他の人）さま異なる（私の）心のほどを御覧せよ」ときこえ給へど、……  
心とけたる御いらへもなし。（源氏→尼君）

③型は主として依頼に用いられるが、源氏の敬度Bの③型六例中三例までが右の依頼の場面に集中して出てくる。  
この依頼者としての源氏の立場や心理は、その全体の言葉遣にも反映し、「あやしき」となれど」と自ら省みて遠  
慮し、女房に対しても「給ふ」を連発し、尼君に対しては「……せ給へ」「御覧す」という最高度の敬語によつて

遇している。『敬語と敬語意識』によれば、

心理的に弱い立場に立つとき（ものを頼むとき、恩恵を受けた場合など）敬語行動はていねいにな（る）ことが報告されているが<sup>\*11</sup>、右の諸例にもよくそれが現われている。（2）の女房に対することばも、「きこえ給ひてむや」であって、「きこえてんや」ではないのである。

③型の表現価値の詳細については拙論に譲るが、右(1)・(2)の例でいえば、これは「きこえ給ひてよ」という命令形による直接的な表現ではなく、「きこえ給ひてーむ」（推量）一や（疑問〈問い合わせ〉）と柔らげた、間接・婉曲的な表現なのである。説明的な直訳と、その余意を示せば、

申し上げて下さるでしょうか（いかがでしょう。そうお願いしたいのですが）  
といった、丁寧な、相手を立てた言い方なのである。

紫上に対する一例も、明石姫君の養女問題を相談、依頼する場面中のもの。

(4) その夜は（源氏は）内裏にもさぶらひ給ふべけれど、（紫上の）とげざりつる御氣色（御機嫌）とりに、夜更けぬれどまかで給ひぬ。……（源氏は紫上に）さし寄り給ひて、「まことは、（明石君に）らうたげなるもの（姫君）を見しかば、（前世の）契り浅くも見えぬを、さりとて物めかさむほども、はばかり多かるに、思ひなんわづらひぬる。（あなたは私と）おなじ心に思ひめぐらして、（あなたの）御心に、思ひ定め給へ。いかがすべき。（引き取りて）ここにて、はぐくみ給ひてんや。（既に）蛭の子がよはひにもなりにけるを。……めざましと（あなたが）おぼさずば、（その子の袴の腰を）ひき結ひ給へかし」ときこえ給ふ。（松風、二・

二二一。源氏→紫上）

大井河畔の邸に明石君を訪ねた源氏は予定より遅れて暫くぶりに帰京した。紫上は嫉妬で不機嫌である。源氏は愛想よく紫上の傍に寄り、恐る恐る明石姫君のことをうち明ける。

実は、すっかり困っているのですよ。

あなたのお考えできめて下さい。どうしたらよいでしょう。

もし、あなたがさしつかえなければ、そうなさつて下さいね。

傍点（線）部をつなぐと、大体こんな調子であろう。源氏は紫上の気持を忖度して、しきりに弁解しながら、慎重なもの言いをしている。あなたは、あなたは、と相手の意向を尋ねており、言つてみれば、あなた任せなのである。末尾の「ひき結ひ給へかし」の「かし」も命令形の強さを柔らげ、優しく相手に働き掛ける調子の語である。

「はぐくみ給ひてんや」はこうした調子の文脈の中の一例である。

続いて玉鬘に対する一例をみよう。

(5) 「まろ（われ）を、昔ざまになずらへて、は、君と思ひないたまへ。（母なれば君の）御心にあかざらんことは、心苦しく」など、いとまめやかにて、きこえ給へば、……（玉鬘）「何事も、思ひ知り侍らざりけるほどより、親はなどは見ぬ物にならひ侍りて。ともかくも思つたまへられずなん」ときこえたまふ様の、いとおいらかなれば、「げに」とおぼい、（源氏）「さらば、世のたとひの（如く）後の（親）をそれ（実の親）と思ひて、（私の）おろかならぬこころざしのほども、見あらはし果て給ひてんや」などうち語らひ給ふ。（されど玉鬘恋しと）おぼす様のことはまばゆければ、（言葉に）えうち出で給はず。氣色あることばは、時々まぜ給へど、（玉鬘は）見知らぬ様なれば、すずろにうち嘆かれて、わたり給ふ。（胡蝶、二・四〇七。源氏→

## 玉鬘)

右は、玉鬘の「後の親」である源氏の言であるが、源氏は自らの玉鬘への想いの故に、カラツとした、直線的なもの言いが出来ないでいるところであろう。ここは「おぼす様のこと」のさすがに「まばゆ」く、心の鬼に忸怩たる、話し手の心のゆらぎをそのままに反映した表現と解したい。

Bの③型の残る一例は常夏の巻の冒頭の次の例である。

(6) いと暑き日、(六条院の)ひむがしの釣殿に出で給ひて、(源氏は)すずみ給ふ。……風は、いとよく吹けども、日のどかに、曇りなき空の、西日になる程、蟬の声なども、いとくるしげに聞ゆれば、(源氏)「みづのうへ無徳なる、今日の暑かはしさかな。無礼の罪は、許されなむや」とて、より臥し給へり。(常夏、三・一一。源氏→内大臣君達他)

この場に同席しているのは、内大臣の君達、夕霧、六条院の家司達であるが、源氏のことばは「許されなむや」であつて、「許し給ひなむや」ではない。右にすぐ続く文で源氏が内大臣の君達に向かつて、眠気覚ましに何か珍しい話を、と求めた語は「ねぶたさ醒めぬべからむ、語りて聞かせ給へ」である。「る」「らる」の敬度が「給ふ」のそれに比べて低いことは既に周知の事実であろう。命令・勧誘表現に用いられた場合も、話し手、聞き手間の身分的な落差は一般に大きく、それだけ「る」「らる」の敬度は低いといえよう。(前稿で具体的に吟味しており、詳細はそれに譲る)。

先の「許されなむや」は、形としては相手に許可を求めているが、実際には無礼は許して貰いましょうかな

### 御免蒙りましようかな

に近い。むしろ、一方的な——宣言とまでいえば強すぎようが——独語的な表現であり、そこに「給ふ」をとらなかつた所以があろう。(③型)が、時にこういう表現価値をもつことは現代語の類似表現と思い合わせて興味深い。

### 六(3)

次にCの③型の例をみよう。

先の六条院の釣殿の場面で、やがて夕方になった。

(7) 夕つけゆく風、いと涼しくて、かへり憂く、わかき人々は思ひたり。  
(源氏) 「心やすく、うち休み、涼ま  
むや。(私も) やうやう、かやうの(若人の) なかに厭はれぬべき齡にもなりにけりや」とて、西の対に渡り  
給へば、きむだち、みな御送りに(源氏の後につき) まわり給ふ。  
(常夏、三・一四。源氏→内大臣君達)  
自分がいては窮屈だろうと察した源氏が、「気楽にくつろいで休み、涼みましよう(なさい)よ」(「大系」頭注)  
と氣を遣つてゐるところである。

(8) 猶いと、(源氏の空蟬への音信が) かき絶えて、(空蟬の) おもふらんことの、いとほしく、(源氏は) 御  
心にかゝりて、苦しく思しわびて、紀の守を召したり。  
(源氏) 「かの、ありし中納言の子(小君、空蟬の弟)  
は、(私に) 得させてんや。らうたげに見えしを。身ぢかく使ふ人にせん。上にも、われ(殿上童として) た  
てまつらん」との給へば(紀守) 「いとかしこき仰言に侍るなり。(されど) 姉なる人にの給ひてん」と申す  
も(源氏は) 胸つぶれて思せど、(帚木、一・一〇〇。源氏→紀伊守)

ここには「……てんや」(③型)と「……てん」(②型)との二つの型が出てくる。これは源氏と紀伊守との会話であるが、依頼者である源氏は「得させてんや」という。言い換えれば「得させ給ひてんや」とは言つていらない。つまり「給ふ」を必要とする相手ではない。両者の身分の懸隔の大きなことは、紀伊守の詞が「申す」で表現されていること、及び紀伊守が源氏に対し「侍り」を連発——右引用部分に一、後続部分に四——していること等からも知られる。その紀伊守は相手に「の給ふ」を使いながらも「……てん」と答えている。依頼者の源氏の方が、より婉曲な③型の表現をしており、ここで両者の立場をうかがわせて面白い例である。<sup>\*12</sup>

以下、Cの③型の例を列挙する。

- (9) 「とりかくさむや。かゝるわざ(贈物)は(一般の)人のする物にやあらむ」(末摘花、一・二六三。源氏  
→大輔命婦)
- (10) 「いま少し、光り見せんや。(ほの明りは)あまり心にくし」との給へば、右近かゝげて、すこしよす。(玉  
鬘、二・三六六。源氏→右近)
- (11) 「直衣こそ、あまり濃くて、かるびたまれ。非参議のほど、何となき若人こそ一藍はよけれ。ひきつくろは  
むや」(藤裏葉、三・一八七。源氏→夕霧)

## 六 (4)

続いてBの②型の例をみよう。

- (12) (新婚の)三日が程は(源氏は)夜がれなく、(女二宮方に)わたり給ふを、(紫上は)年頃、さもならひ

給はぬ心中に、忍ぶれど、猶、物あはれなり。……（源氏はこのような事態になつたことを反省し）われながら、（我身を）つらくおぼし続けらるゝに、涙ぐまれて、「今宵ばかりは、（女三宮方行きを）ことわりと、ゆるし給ひてんな。（御身に）これより後のとだえあらんこそ、（我が）身ながらも、心づきなかるべけれ。（しかし）また、さりとて（女三宮への疎隔も）かの（朱雀）院に、聞し召さんことよ」と、思ひ乱れ給へる御心のうち、苦しげなり。（若菜上、三・一二四七。源氏→紫上）

女三宮が降嫁して六条院に入った。その新婚の三日の夜の、源氏と紫上の複雑な心情を描いた部分。源氏はとつおいつ思い乱れながら苦しげに女三宮方行きの了解を求めているのである。

今宵ばかりは、ことわりと、ゆるし給ひてんな。

源氏の息づきが聞こえるような表現である。なお、これは②型の文末に終助詞「な」のついた極めて珍しい例である。

(13) （源氏は）日高う寝起き給ひて「人（女房）なくて、あしかめるを、さるべき人々、タづけてこそは、迎へさせ給はめ」と、の給ひて、対に、童召しに（人を）つかはす。（若紫、一・一二二八。源氏→少納言の乳母・若紫）

これは②型が係結をとつた例である。しかも、ここは「こそは……給はめ」と更に強い言回しになつてゐる。相手の行為の実現を強く推量することによつて、結果として、相手の行為の実現を促すことになり、勧奨となつてゐるのである。

右で少納言の乳母に対して源氏が敬体の表現をとつてゐるのは、傍らの若紫を意識してのことばかりであろう。佐伯博士は

これは少納言に向かつてのことばであるが、人を迎えるのは、姫君の動作として、つまり姫君にすすめる形の言い方で言つていて。<sup>\*13</sup>

と説明されている。以上によつて、ここ<sup>\*</sup>の聞き手を若紫をもつて代表させる。

(14) (源氏) 「それは、かりそめならず、命ながき人々にも、さやうなる事の、おほかた少なかりけるみづから  
の口惜しさにこそ。そこ」(夕霧)にこそは、門は広げ給はめ」など、のたまふ。(幻、四・一二〇。源氏→夕霧)  
日本古典文学全集『源氏物語』はこの部分「ほかならぬあなたは、この家門を広げ繁栄させていただきたい」と  
訳している。前例同様、係結の形をとり、依頼、懇請しているものである。

Bの②型の残る三例を摘記する。

- (15) 「おほえなき様なるしもこそ契りあるとは思ひ給はめ。」(帚木、一・九七。源氏→空蟬)
- (16) 「中将にこそ、かやうにては着せ給はめ」(野分、三・六〇。源氏→花散里)
- (17) 「物の師をこそ、まづは、ものめかし給はめ」(若菜下、三・三四五。源氏→女三宮)

結局、源氏のBの②型六例中五例までは右のように「こそ…給はめ」の形をとる。

## 六 (5)

童兵部卿宮・紫上・玉鬘・夕顔に対しても敬体(以上)の表現がとられているが、この四者に対し、各一例Cの②型の表現がみられる。次の例である。

- (18) 「今夜は、鈴虫の宴にて明かしてん」とおぼし、(人々にも)の給ふ。(鈴虫、四・八五。源氏→童兵部卿宮)

この場の「人々」は、畠兵部卿宮・大将の君（夕霧）・さるべき殿上人であるが、ここは畠兵部卿宮で代表させた。

(19) 「君はいざ給へ。（祭りを）もろともに見むよ」とて、（紫上の）御髪の、常よりも清らに見ゆるを、かきなで給ひて、（葵、一・三二四。源氏→紫上）

(20) 「……いざ、たぐひなき物がたりにして、（我等が仲をば）世に伝へさせむ」と（玉鬘に）さし寄りて聞え給へば、（董、一・四三三二。源氏→玉鬘）

(21) 「いざ、たゞ、このわたり近き所に、心安くて明さん。かくてのみは、いと苦しかりけり」とのたまへば、（夕顔）「いかでか。にはかならん」と、いとおいらかにいひて居たり。（夕顔、一・一四〇。源氏→夕顔）これらは何れも、話し手自身を含めた勧誘であり、敬体表現をとらないのはそのせいである。

Cの②型の残る一例は源氏が若紫を一條院に移す場面のもの。

(22) 「よし、後にも、人は参りなむ」とて、御車寄せさせ給へば、（女房達は）「いかさまに」と思ひあへり。（若紫、一・一二二六、源氏→若紫の女房少納言達）

（）は「源氏、少納言が詞は聞もいれ給はず、よし紫の供には跡からなりともまるれとて紫を車にのせ給ふ也」（『増註源氏物語湖月抄』所引「師説」）という解に従い、「参る」の敬意は若紫に対するものとみておく。

なお、紫上に対して、Cの①型が一例だけみられる。

(23) 「いと、うたて、あわたゞしき風なめり。御格子下してよ。男子どもあるらんを。あらはにもこそあれ」と、きこえ給ふを、（野分、三・四七。源氏→紫上）

右は、野分の巻の冒頭近く、激しい野分の翌日の場面である。紫上に対する源氏のことばが常体なのは何故であ

ろうか。（地の文には「きこえ給ふ」とある）。これは実際に格子を下ろすのは紫上ではなくて、女房の行為であること自明だからと解すべきか。なお、「源氏物語」には「御格子下し給へ」「御格子下し給ひてよ」という例はない。あるいは、「男子どもあるらんを。あらはにもこそあれ」と言っている（「もこそ」と強く危惧している）が、こうした急迫した場面のことばだからであろうか。緊急の時、急いで強く命令する時など敬意の低い表現にあることがあるが、ここもその例とすべきか。<sup>14</sup>

更にまた、これは次の「御格子まゐりね」等と比較して、その表現価値を考えるべきものであろうか。

(24) 「御格子まゐりね。物恐ろしき夜のさまなめるを。（私は）とのゐ人にて侍らん。人々（此処に）ちかう侍らはれよかし」と馴れ顔に御帳の内に（源氏が若紫と）入り給へば（若紫、一・一一七。源氏→女房）

なお、右(24)は源氏が若紫の邸に初めて一夜を過ごした時、若紫が奥に「ひき入り給ふに（源氏も）つきて（御帳台の中に共に）すべり入」つた時の女房との応答の部分。源氏は女房達にもさすがに改まつた口つきである。

右近に対して二例だけBの①型の表現がみられる。

(25) （源氏は）右近召し出でて、「かやうに（懸想文にて、玉鬘を）おどづれ聞えん人をば、人選りして、いらへなどはせさせよ。……宮（蛍）大将（鬚黒）あぶなあぶな、なほざりごとをうち出で給ふべき（方）にもあらず。また（その方々に）あまり物の程知らぬやう（玉鬘が無愛想）ならんも、（玉鬘の）御有さまに違へり。その（二人の）きはより下は、（其の人の）心ざしのおもむきに従ひて、哀をもわき給へ。労をも数へ給へ。（その上にて返り事もせさせよ）」など（右近に）きこえ給へば、きみ（玉鬘）は、うちそむきておはする、側目いとをかしげなり。（蝴蝶、一・四〇四。源氏→右近）

右は、直接は右近に対する詞であるが、後半の部分（「御有さま」以下）は、傍らの玉鬘を意識した表現になっている。右近に対する九例中ここだけ敬体をとっているのはそのせいである。しかも、源氏のこの対玉鬘意識は、地の文の「きこえ給ふ」にも反映しているとみるべきであろう。（先の第7表で右近の地の文の待遇が⑥・⑦になつてているのはこの例による）。

## 六（6）

源氏が敬度Aの待遇をとつてているのは、表の上部の十名足らずである。尼君に対する一例については既に例文(3)で触れた。

紫上に対する命令・歎誘表現の例は二七例と最も多いのであるが、B待遇が二四例、C待遇が二例（既述）である。一例だけAのものがある。

(26) 「かむの君（朧月夜）に、さま変りたまへらむ（尼の）装束など、まだ裁ち馴れぬほどは、（当方より）とぶらふべきを。袈裟などはいかに縫ふものぞ。（君は）それせさせ給へ。一具は六条のひんがしの君（花散里）に物しつけん。うるはしき法服だちては、うたて見る日もけうとかるべし。さすがに、その心ばへ見せてを」などきこえ給ふ。（若菜下、三・四〇三。源氏→紫上）

この部分、「日本古典文学全集」では、かむの君に援助しようと考える源氏の気持ちには、彼女への捨てきれぬ執着・執心があろうと解釈する。衣装についての源氏の並々ならぬ配慮や、右の文に続く最高級の調度類の調達にそれをみる訳である。そのことに起因する紫上に対する遠慮、引け目がこここの表現に反映しているのではあるま

いか。

源氏が話し手の例の最後としてAの②型の一例を見る。

(27) 夜すこし更け行く程に、源氏の君、いたう酔ひ悩めるさまにもてなして、まぎれ立ち給ひぬ。寝殿に、女一宮、女三宮のおはします東の戸口におはして寄り居給へり。藤はこなたのつまに当たりてあれば、御格子ども上げわたして、人々出でるたり。(女房の)袖口など、踏歌のをりおぼえて、ことさらめき、もて出でたるを、(源氏は)ふさはしからず、まづ藤壺あたり思し出でらる。「なやましきに、いといたう(酒を)強ひられて、わびにて侍り。かしこけれど、このお前にこそは、陰にも(私を)かくさせ給はめ」とて、妻戸の御簾を引き、給へば、(女房)「あな煩はし。よからぬ人こそ、やむ事なきゆかりは、かこち侍るなれ」といふ氣色を見給ふに、(花宴、一・三一二)。源氏→女一宮・女三宮

右大臣邸に藤の花の宴があつた。源氏は相當に酔つた風をして、言い掛かりをつけて、朧月夜を見出そうとしている場面である。「かしこけれど」と低姿勢に出て、「こそは……せ給はめ」と鄭重に依頼しているが、こゝも下心に基づく自らの行動に、引け目を感じているところであろう。

以上、源氏が話し手の場合をみてきた。次は、源氏が聞き手の場合に移る。

## 七

これも先ず一覧表を示す。

### 七(1)

第8表 源氏が聞き手の場合

敬度型 聞手(地の敬度)	A				B				C				D				N				計
	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①	
桐壺帝・故院Ⓐ										1	2										3
朱雀院Ⓑ									1												1
藤壺中宮Ⓑ									1												1
六条御息所Ⓑ			1						1												2
左大臣Ⓑ			1						1												2
大宮Ⓑ			1																		1
紫上Ⓑ									3												3
尼君(紫上祖母)Ⓑ			1																		1
頭中将ⒷⒸ		1							1												2
左馬守Ⓒ			1																		1
紀伊守Ⓒ								1													1
明石入道Ⓒ			2																		2
大徳(北山聖)Ⓒ			1																		1
惟光Ⓒ		3	2																		5
供人Ⓒ			1																		1
ある人Ⓒ			1																		1
六条御息所の物怪Ⓒ				1					2												3
小計	0	0	6	11	0	0	1	10	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	31
				17			11					3				0				0	
%	54.8			35.5					9.7				0				0			100	
源氏物語全例%	18.9			53.8					24.0				2.8				0.5			100	

この表から知られるところを箇条的に記す。

(1) 用例数は三一例である。源氏に対することは全体として敬度がはなはだ高く、敬度指数はプラス一、九〇である。これは敬度A、Bの例が九〇%を占め、Cがわずかに一〇%弱であることから来る。因みに、単純化していえば、敬度A、Bが各五〇%の場合、敬度指数はプラス二、〇〇となるのである。源氏の敬度指数の高さが窺われるようと思う。

(2) ②型の率が高い。『源氏物語』全体の②型の比率は六、一%、源氏は二五、八%である。それだけ源氏に対しては間接的な慾憇の表現が多いことを示している。

(3) その中につけて、C(常体)の、しかも①型の表現が二例ある。

先ず、(3)をみよう。それは次の例である。

## 七(2)

(28) (帝) 「わざと（右大臣から迎えが）あめるを、早う、ものせよかし。（弘徽殿腹の）女御子達なども、生ひ出づる所なれば、（源氏を）なべてのさまには（右大臣は）思ふまじきを」などのたまはす。（花宴、一・三一一。桐壺帝→源氏、C・①型）

右大臣邸の藤の宴に招かれた源氏に、父桐壺帝が出向を促している場面である。

(29) 故（桐壺）院、たゞ、おはしまししまながら立ち給ひて、「など、かくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて、ひき起て給ふ。（故院）「住吉の神の導き給ふまゝに、はや舟出して、この浦を去りね」とのたまはす。（明石、二・六二）。故（桐壺）院→源氏、C・①型）

源氏が夢想で故桐壺院から「須磨を去れ」との訓諭を蒙る場面。ここのことばは全体に莊重で厳しい口調になっている。

源氏に対しても敬語なし（常体）の表現はもう一例、同じく父帝の例がある。これはCの②型である。

(30) 故宮の、（六条御息所を）いと、やむ事なくおぼし、時めかし給ひし物を。軽々しく、おしなべたるさまに、（源氏が）もてなすなるが、（御息所に）いとほしきこと。斎宮をも、（我は）この御子達の列になむおもほへば、（故宮と我との）いづ方につけても、（源氏は御息所に）おろかならざらむこそ、よからぬ。心のすさびに任せて、かく（御息所に）すきわざするは、いと、世のもどき負ひぬべき事なり」など、（院の）御氣色あしければ、（源氏は）わが御心地にも、「げに」と、思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひ給ふ。（葵、一・三一八。桐壺院→源氏、C・②型）

こゝは「おろかならざらむこそ、よからめ」とあって、述語は動詞ではない。しかし、疎略にせぬがよからう（そ  
うせよ）と勧奨したものであり、特に②型（「11（給ふ）べし」）に準ずる例として採ることとしたものである。  
結局、源氏に対しても尊敬語なし（常体）の表現をとり得るのは父桐壺帝のみである。

②型の例を続けよう。

### 七（3）

(31) 「はや、御馬にて、二条の院へおはしまさん。人さわがしうなり侍らぬ程に」（夕顔一・一五四。惟光→源氏、  
A・②型）

「おはしませ」を「おはしまさん」と推量の形で柔らげたものである。

(32) 「夜は明け方になり侍りぬらむ。はや（二条院に）かへらせ給ひなん」（夕顔一・一六一。惟光→源氏、A・  
②型）

(33) 「暮れかゝりぬれど、（わらは病が）おこらせ給はずなりぬるにこそは、あめれ。（京に）はや、帰らせ給  
ひなん」とあるを、（若紫、一・一八三。供人→源氏、A・②型）  
一例ともに、「かへらせ給ひね」を「……なーん」と柔らげ、「……よろしうございましょう」と主人に勧めた  
ものである。このAの②型の六例中三例までは係結をとる。

(34) ある人、「北山になむ、なにがし寺といふところに、かしこきおこなひ人侍る。去年の夏も、世におこりて、  
ひとびと、まじなひわづらひしを、（北山の聖は）やがて、とゞむるたぐひあまた侍りき。し、こらかしつる

時は、うたて侍るを、とくこそ心みさせ給はめ」など、きこゆれば、（若紫、一・一七七。ある人→源氏、A・

②型）

(35) まことは、かやうの御歩きには、隨身がらこそはかばかしきこともあるべけれ。（私を）おくらさせ給はで  
「そあらめ。やつれたる御歩きはかるがるしき」とも出で来なん」とおしかへし、いさめたてまつる。（末摘花、  
一・二四一。頭中将→源氏、A・②型）

(36) 「更に、え（踏み）わけさせ給ふまじき、蓬の露けさになむ侍る。（供の者に）露すこし払はせてなむ、入  
らせ給ふべき」ときこゆれば、（蓬生、二・一五五。惟光→源氏、A・②型）

この「なむ……べき」の係結による慾憇の例は珍しい。

Bの②型の一例、紀伊守の例は、先に例文(8)で触れたものである。

七 (4)

Bの①型の中から、紫上の例を見る。

(37) （若紫は）やがて、（源氏の）御膝によりかゝりて、寝入り給ひぬれば、（源氏は）心苦しうて、「今宵は  
出でずなりぬ」との給へば、（女房達は）みな立ちて、御膳など、こなたに参らせたり。ひめ君起したてまつ  
り給ひて「出でずなりぬ」と聞え給へば、なぐさみて起き給へり。もろともに物などまる。いとはかなげに  
すさびて、（若紫）「さらば（源氏も）寝給ひねかし」と、（源氏の外出を）あやふげに思う給へれば、かゝ  
るを見捨てては、いみじき道なりとも、おもむきがたく思え給ふ。（紅葉賀、一・二八八。若紫→源氏、B・

(①型)

若紫はこの時十一歳、年齢に比してまだ言動は子供らし過ぎ、「今年だに、少しおとなびさせ給へ」などと乳母に注意されている。この「寝給ひねかし」という表現も子供らしいことばつきであろう。勿論「寝よ」ではなく「寝給ひねかし」とはあるが、しかし

(源氏) 「今更に、(私に) など忍び給ふらむ。この膝の上に御殿籠れよ。いますこし寄り給へ」との給へば、

(若紫、一・二二六。源氏→若紫)

の「御殿籠る」という改まつた言葉遣ではない。『落窪物語』には、あこきが女主人(女君)に対して「おほとの「もりね」と言つてゐる例があり、「寝給ひね」との差が知られようと思う。「御殿籠る」のこうした性格ゆえに、同じく『落窪物語』で、中納言の北の方は、継子の落窪の君のことを御とのごもるという語を用いて語つた侍女に對して、

なぞの御とのごもりぞ。もの言ひ知らずなありそ。われらと一つ口になぞ言ふは。

と叱りつけることにもなる。

一方、『枕草子』に、夜遅く、女房たちが控の部屋で、着物の名称の当否をめぐつて大騒ぎをしている場面で、  
……など、よろづのことをいひのゝしるを、「いで、あなかしがまし。いまはいはじ。寝給ひね」といふ(新

日本古典文学大系、一一七段)

とあるが、これは女房同士わいわい大声でやりあつていた時のくだけた言葉遣なのであろうと思う。また『落窪物語』

に

(男君) 「夜いたう更けぬ。(縫い物が) 多し。寝給ひね」と責むれば、(女君) 「いますこしなめり。早う寝給ひね。縫ひ果てらんよ」と言へば(巻一)

という例がある。繼母北の方からの縫い物をしているところで、冗談を言つて笑いながら男君も手伝つたりしている。ここでは互いに同じ言葉遣をしている。互いの、うちとけた親愛の情が窺われよう。

更に「寝給ひねかし」の「かし」もはなはだ打ち解けた調子である。この「かし」の表現価値は「親昵」「狎昵」とでも言うべきものであろう。要するに、先の若紫の「寝給ひねかし」は子供らしいことばつきであると考へる。(なお、『源氏物語』全体の「かし」については改めて後述する)。

(38) 年月経るまゝに、御中いとうるはしく、睦び聞えかはし給ひて、いさゝか飽かぬことなく、隔てもみえ給はぬ物から「今は、かうおほぞうの住ひならで、(尼にて) のどやかに行ひをもとなん思ふ。この世は、かばかりと見果てつる心ちする齡にもなりにけり。さりぬべきひとまに、おぼし許してよ」と(源氏に)まめやかに聞え給ふ折々あるを、(若菜下、三・三二八。紫上→源氏、B・①型)

紫上が源氏に出家の許しを乞うている場面である。初めの第1表に見るとおり「てよ」「給ひてよ」の例はそれぞれ六例、一一例である。この計一七例のうち五例までが、この例のように出家を乞う際のものである。女三宮一例、浮舟三例、紫上一例である。出家という大事に当たつての真剣な心情が「てよ」に込められているのであろう。こも「まめやかに聞え給ふ」とあって、紫上の心からの懇願であることが知られる。因みに、源氏に対する命令・勧誘表現全三一例中、「てよ」「給ひてよ」の例はこの一例のみである。(なお、『源氏物語』全体の「てよ」について改めて後述する)。

紫上から源氏に対する残る一例（藤裏葉、三・一九八。B・①型）の吟味は省略する。

以上で源氏が話し手・聞き手の場合の考察を一往終える。他の主要人物の場合や、重要な表現形式等の考察については続稿に譲ることとする。

注

\* 1 A 「中古仮名文における命令・勧誘表現体系」（「国語国文」第四四卷第三号）。一九七五年三月。

B 「『今昔物語集』における命令形「召セ」の待遇価値—付動詞命令形「給ヘ」「給ベ」—」（「史料と研究」第二五号）。平成八年二月。

C 「『今昔物語集』の命令・勧誘表現・序章—用例の採否・分類の基準と用例一覧表等—」（「史料と研究」第二六号）。

D 「『敬度』『敬度値』『敬度指数』—敬意の度合の客観的な把握のために」（札幌大学文化学部紀要「比較文化論叢」1。平成九年六月）。

E 「命令・勧誘表現研究のために」（札幌大学文化学部紀要「比較文化論叢」2。一九九八年七月）。

F 「『今昔物語集』における命令・勧誘表現の種々相」（札幌大学文化学部紀要「比較文化論叢」3。一九九九年三月）。

G 「『落窪物語』の命令・勧誘表現」（札幌大学文化学部紀要「比較文化論叢」4。一九九九年八月）。

\* 2 \* 1論文中のA・D・G。

\* 3 \* 1論文中のE。

\* 4 具体例を示す。

この三條がいふやう「……あが姫ぎみを、大式の方ならずば、当國の受領の方になしたてまつり給へ。……」と、ひたひに手をあて、念じ入りてをり。（「大系」玉髣、第二冊三四九頁）。

『源氏物語大成』によれば、右の傍線部、青表紙本「なしたてまつらむ」、河内本及び別本の一部「なしたてまつり給へ」とある。よって、これは用例としない。

「……かの院のうちに、あくがれありかば、結びとめ給へ」など、(「大系」柏木、四・一六)青表紙本「むすひと、めたまへよ」、別本中の国冬本のみ「むすひと、めたまへ」である。こゝは「よ」を補つて用例とする。

なお、③は次のような例を指す。「書き給へ」と「書い給へ」、「……給ひてよ」と「……給うてよ」、「心のどかに思しなせ」と「心のどかに思しなせ」等の相違、あるいは修飾語の小異等は問題としない。

\* 5 用例数が前稿と異なっているのは主として採否基準の変更による。

( )内は%

品別型別用例数

\* 6 \* 5

作品 型	① 型	② 型	③ 型	④ 型	計
竹取物語	37 (86.0)	3 (7.0)	1 (2.3)	2 (4.7)	43
尹勢物語	8 (72.7)	3 (27.3)	0 (0)	0 (0)	11
大和物語	47 (94.0)	2 (4.0)	1 (2.0)	0 (0)	50
客窪物語	292 (93.6)	18 (5.8)	2 (0.6)	0 (0)	312
原氏物語	566 (88.7)	39 (6.1)	28 (4.4)	5 (0.8)	638
平中物語	40 (83.3)	6 (12.5)	0 (0)	2 (4.2)	48
臺物語	7 (77.8)	2 (22.2)	0 (0)	0 (0)	9
友の寝覚	129 (90.2)	9 (6.3)	4 (2.8)	1 (0.7)	143
是中納言物語	45 (100.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	45
土左日記	8 (100.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8
蜻蛉日記	74 (83.2)	10 (11.2)	2 (2.2)	3 (3.4)	89
知泉式部日記	17 (81.0)	3 (14.3)	1 (4.7)	0 (0)	21
紫式部日記	8 (88.9)	1 (11.1)	0 (0)	0 (0)	9
更級日記	24 (96.0)	1 (4.0)	0 (0)	0 (0)	25
賛岐典侍日記	70 (92.1)	3 (3.95)	3 (3.95)	0 (0)	76
計	1372 (89.8)	100 (6.5)	42 (2.8)	13 (0.9)	1527

詳しくは \* 1 論文の D。

\* 7  
\* 8  
\* 1 論文の D。

\* 9  
\* 1 論文の D。

\* 10  
\* 11  
\* 12  
\* 13  
\* 14

他の作品（『落窓物語』『夜の寝覚』）の性別敬度指数を \* 1 論文の D に述べた。

『国立国語研究所報告 11』三七六頁。

この紀伊守のことばの解釈、その語法的な説明は懸案のものであった。詳細は前稿に譲る。

『校注日本文芸新編 源氏物語新抄』武藏野書院刊、九六頁。

『落窓物語』の例を \* 1 論文の G に挙げた。